

C. L. Albanese: *Nature Religion in America — From the Algonkian Indians to the New Age —*

(Chicago History of American Religion) The University of Chicago Press,
Chicago and London, 1990, xvi+267pp.

藤原聖子

19世紀アメリカ（正確にはアメリカ合衆国）では、資本主義経済が急成長を遂げる一方、宗教においては、エヴァンジェリズムの勢力が躍進し、また制度の形をとらない様々なスピリチュアリズム的宗教も広く浸透しつつあった。これらの宗教の動向を特徴づける時、これまでは心理（学）主義や体験主義、あるいは内面化、私化、または反主知主義（実践重視）といった概念が用いられてきた。だが私見では、特にスピリチュアリズム的宗教に対し、心理主義のような概念は必ずしも十分に適合してはいないように思われる。もし、宗教的体験や精神的変革のみに救済財が限定されるのであれば、貫徹した心理主義といえるかもしれない。しかし、そこで直接的に希求されるのは、個人の身体的健康状態の改善であったり、その理論においては、精神が身体他に物理的影響を及ぼすエネルギーのような実体的存在としてとらえられたり、身体の物理的浄化が精神の浄化と相即するといった説明が見られる。すなわち、この宗教には意外と物質的な側面が強いのである。もちろん、此岸での物質的財を求める現世利益的宗教というのであれば、珍しくはない。アメリカのこの時期の非既成宗教の特徴は、現在のアメリカ人の健康管理への強い志向（エクササイズ、食事療法、サイコセラピー等）の源となった、ある独特な物質的側面に存する。まさにこの側面をとらえる概念として「自然」を提案しているのが本書にほかならない。

本書で中心となる「自然宗教」は、従来の宗教学の概念である、「nature religion 自然宗教」とも「natural religion 自然的宗教」とも異なる概念で、独自の新しい規定によるものである。著者は、西洋の伝統では、宗教に3つのシンボル体系上の中心symbolic center、「神」「人」「自然」が存在しており、通常は前二者が強調されていたが、アメリカでは「自然」のシンボルが（ただし神を排除することなく）浮上したとみる。この「自然」というシンボル上の中心と、それを囲む信念、行動、価値の総体が「自然宗教」と命名される。この概念が包摂する現象は、山や天体等の自然物に対する崇拜にはとどまらない。どちらかといえば、「疑似科学」「通俗科学」と呼ばれてきた、民間の健康法のような、必ずしも「宗教」とはみなされず、歴史上も等閑視されてきた現象に、本書の関心はより多く向けられている。著者はこれらの現象も、リアリティーを組織化し、そのリアリティーと関わるための一貫した包括的な手段を備えている点で「宗教」の一つとして考えるのである。

確かにこの種の宗教は、既に一種の汎神論的・神秘主義的な宗教の類型に割り振られてきたともいえ、新たな命名・ジャンルの設定には及ばないとみえるかもしれない。だが、著者は「自然宗教」の概念を、宗教の新しい一類型としてではなく宗教史をとらえる際の「準拠点」として設けている。実体概念より

も方法概念としての性格をもっているといえよう。この新概念の導入によって、広くアメリカ宗教史の流れを自然宗教の展開という観点から再解釈・再構成することが試みられているのである。

よって、登場する宗教は植民以前から現在まで多岐にわたり、自然宗教という言葉からはすぐには連想し難いものも含んでいる。それらについて年代順に、「自然」がどのように解釈され重視されていたか、その解釈が人々の生活の様式をどのように規定していたかが明らかにされていく。著者は宗教を社会、文化全体から切り離して論じることは避けるが、他方、社会科学的な還元的説明ではなく、エリアーデ宗教学を引き継ぐことによって、自然宗教間の固有の関係性、共通のシンボルのロジックを掘り出す方法をとる。そしてそれを通して、多様な自然宗教から、通時的な一つの発展のマトリックスを示すことを目標としている。その背後の問題関心としては、自然宗教のシンボル・パターンが、現在のアメリカの宗教・文化の中にいかに引き継がれているかを跡付けることによって、それへの理解を深める、という解釈学的な自己理解的欲求があるようである。本書の場合は特に、宗教の非主流系列の中に、アメリカ文化を（ピューリタニズムに連結した）近代的合理主義以上に規定してきたものを見出すことが狙いとされている。この方向性は、著者の民衆宗教への強い関心にも現れている。直接の資料源は、自然宗教の中心者による思想に関する文献が主ではあるが、著者によれば、それらの作者はある程度の教養を持つものの、エリート知識人とは異なり、民衆心性を多く分有する中間的存在で、民衆宗教を理解するには有効な対象なのである。

それでは、具体的に著者がアメリカ史のどのような箇所自然宗教を見いだしたかを一通り追ってみよう。まず、「自然」自体がそもそも西洋的概念であることを認識する著者は、植民以前からの北米インディアンに対し、西洋の伝統的な自然（生物から天体まで含めた

集合的な物理的な全体。秩序あるコスモス）を一応基準に置き、その自然をインディアンがどのように解釈したかを問う。それによると、彼らは世界は具体的な、複数の人格的な存在から成り立っており、自分達と親族関係をもっていると考え。よって、自然は、人間を含んだ宇宙全体の中に溶け込んでいるとされる。別の見方では、西洋における日常と非日常（俗と聖）の二分はここにはなく、社会の中心にも周縁にも自然が存在する。また人間を侵害する自然の力に対する制御は、同じ自然との調和の回復によってなされた。自然とのこれらの関係性については一定のコスモロジーがあり、それに従って型を与えられた彼らの生活には、自然宗教が息づいていたとされる。

これに対し、「自然」とは最も疎遠なはずの、17世紀に入植したピューリタンにとっても、それは新大陸における自己の経験を意味付ける上で、やはり重要なシンボルであった。彼らにとって荒々しい野生である自然の持つ意味は両義的であり、恐るべき危険な荒野であると同時に、試練の場、あるいは出エジプトのメタファーによる魅惑の聖地としての新大陸のシンボルにもなりつつあった。ただしいずれの場合も、自然に対する征服は肯定的に受けとめられた。

そのピューリタンの経験には、18世紀初にはジョナサン・エドワーズ等の下で哲学的反省が加えられた。彼は山野で得た霊的体験に基づき、自然を神の現前を表すものとし、現世と聖なる世界とのアナロジー性を主張した。強い観念論的傾向によって、自然は単に感覚される現象とみなされ、その実質は否定された。

独立革命期には、「自然」のシンボルを中心に、独立と征服を正当化するイデオロギー神話（“manifest destiny”）、著者が呼ぶところの「republican religion 共和制宗教」が形成される。その政治理念において、自然は、第一に新大陸の無垢、純潔を象徴し、第二に宇宙における一定の法則と一致する、人間の

権利と義務を政治体の中で基礎づける普遍法、すなわち自然法という民主主義の根本原理を表し、第三に共和国内の賛美すべき雄大な景観として、共和国自体の国力と運命を象徴する崇高さを示した。ジェファソン等にみられるこの自然宗教は唯物論的である。精神を物質とし、人間の神格化を認めるこのラディカルな経験主義を、著者はアメリカの民衆宗教の特徴とする。また、19世紀に引き継がれた共和制的自然宗教の例として、荒野を舞台とする冒険譚が分析され、自然が帝国主義的支配の対象となるとともに、社会からの逃避先としても機能していた点が指摘される。

19世紀後半には、カルヴィニズムのみならずロマン主義、通俗科学（メスメリズム、スウェーデンボルグ主義等）の混在した当時の民衆心性と密接した、超越主義が出現する。その代表者エマソンにおいては、自然体験を核としつつも、エドワーズにはなかった観念論的自然観と実在論的自然観のディレンマが生じる。すなわち、自然それ自体が神性を持ち、自然との調和が救済となるのか、それとも自然は単なる“passing show”で、その背後の絶対者が顕現する場に過ぎず、よって精神による自然支配が救済をもたらすのかという両端の間を彼の思想は揺れ動いている。また、アメリカ的発想とされる、時のリバイバリズムに通底する完全論、現世での人間の神格化可能性への信奉がみられる。つまり、自然宗教は千年王国運動としての側面も持つのだが、この千年王国の徴候を自然保護に認め、より直接的行動に踏み出したのが、19世紀後半の自然保護運動（国立公園、ボーイスカウト、自然作家）である。

自然保護運動が超越主義におけるディレンマを唯物論の側へ傾けたとすれば、19世紀にはその逆の、形而上学化の動きも起こった。後世のニューソートへ大きな影響を与えたアマチュア神学者クインビーは、メスメリズム、スウェーデンボルグ主義等をつなぎ合わせた思想の下に、精神治療を実践した。彼は、事物の背後に知としての神を置くので、観念論

的色彩が強い。しかし、精神を“spiritual matter”であるとみなし、その障害として病因を説明するように、形而上学的リアリティーをフィジカルに解釈しようとした点でなお、自然宗教であったと著者は評価する。さらに観念論へ傾斜するクリスチャン・サイエンスにおいては、物質の存在までが否定されるが、なお「自然」のシンボルは残っていたことが指摘される。

この精神治療に続き、身体を自然宗教の実践の場を選んだ、physical religionないしhealing religionと著者が呼ぶ一連の健康法が、より唯物論的な自然宗教として登場する。いずれも治療活動に加えて、規範的生活様式を備えている。その根幹には、本来キリスト教のものが、自然的・生理的に読み替えられて私化した罪と恩恵の観念がある。病因は神からの罰等ではなく、個人の不節制な生活から生じる生理的自然の法の侵犯とされる。よってその治癒は本人のイニシアティブによる生活改善にかかっている。ここに、救済の自力的達成を楽観する完全論を掲げる当時のリヴァイヴァリズムの精神が、啓蒙主義の自然法思想を再編成した過程がみられる（政治体ではなく、個人の健康状態と自然の法の相即を求める）。この自然宗教は、Christian Physiology運動と医学的セクト主義に分けられる。前者は個人の健康の問題から、千年王国運動の様相を持つ社会的な道徳改革運動に発展する。後者は、より治療活動を中心とし、用いられるメタファーにはメスメリズムやスウェーデンボルグ主義がより濃厚に現れている。その内訳は、Thomsonism（菜食主義）、同種療法、水治療法、整骨療法、脊椎指圧療法と続く。これらは手段こそ異なれ、発想には共通性があり、より自然に近い状態に至るために自己の生活を統制することを目的としている。

この後、著者は対抗文化以降の現代のニューエイジ運動の足跡を辿り、そこに再臨している以上の自然宗教と同じシンボル・パターンと、それらとは異なる新しい要素を

探っていく。取り上げられるのは、インディアン文化の再評価、自然作家、緑の党、フェミニズム、^{ホーリスティック}全体論（医学）等である。そこではかつての自然支配の姿勢が批判を受け、自然との新しい関係が模索される。また、この段階に至って、超越主義以来の自然の实在・仮象の分裂は宗教的によりよく総合されたと著者は認識している。20世紀初頭から、通常科学の分野でも近代科学、ニュートン力学のパラダイムを覆した量子力学が、通俗化した形で、この時代の自然宗教の理論的バックボーンとなったためである。半ば生命、自由意志を持ったかのような量子の観念は、宇宙と精神を単なる物質ではない生きたエネルギーとする考えを裏付けたとされる。

アメリカ宗教史の全体像は、これまでは反発し合う二大潮流の展開として把握されることが多かったようである。本書の序言で編者 Martin E. Marty が提示しているような、理性的・公的・男性原理的宗教（17世紀ピューリタン等）／感情的・私的・女性原理的宗教（超越主義等）の著者が対立図式は定着している感がある。しかし、著者が近代的合理主義以上のアメリカ文化の規定要因である自然宗教として取り上げる対象は、決して後者の宗教系列に限定されずに、双方にまたがっている。しかもそれらの間に、共通性や影響関係を認めるだけでなく一つの発展系列を読み取るに至っている。この点において、著者は一つの斬新なアメリカ宗教史解釈を示したと言えよう。だが、その新しさゆえに、なお理論に不安定な所も見受けられるので、これについて特に次の二点に分けて疑問点を挙げておきたい。

①「自然宗教」概念の妥当性と宗教研究における意義

②自然宗教が特にアメリカにおいて発達した原因

① まず「宗教」の規定をみると、それは、日常の力・意味・価値（社会の境界内にあり、文化を構成）と非日常の力・意味・価値（境界外）との関係において、世界の中で自己を

方向づけることとされている。宗教は、社会の中心へ人々を凝集させるとともに、その外部、超越の場所へも導く。[この宗教の概念規定について一言付言するならば、従来この種のモデルをとる場合は、宗教的中心は社会の地理上の中心と一致し（聖なる場所、神殿を中心とする集落）、自然は社会の外側に位置付けられた。しかし、自然を中心に据える自然宗教では、このモデルをどう適用するのかが明言されていない。著者自身、地理上とシンボリズム上の同心円状のモデルを混同している箇所もある。自然宗教を対象にとったことによって、逆に著者の基幹的な宗教モデルを変更する必要性も生じてきたのではないか。]

ところで、評者の見るところでは、この宗教モデルの中に、自然宗教での「自然」の意味は内包されている。日常ノモスとしての社会（俗）に対する所の非日常ノコスモス・カオスとしての社会の外部（聖）という構造上、自然はコスモスないしカオスとして宗教的意味を持ち得ることになる。コスモスたる自然が自然法のような規範的秩序の形をとり、カオスたる自然が荒野のような反文明・無秩序の形をとり、また両者とも本来的・始源的という意味を持つのである。そこから必然的に、前者に対しては人間は調和を得ようとするし、後者に対しては克服を試みることになる。この点は著者の論法では、例えば、自然体験が宗教体験に酷似した特徴（両義性）を持つので、それは自然宗教という宗教の一種とみなされる。だが、むしろ、始めにとった宗教モデルから、自動的に自然が聖性のシンボルであることが引き出されるのである。とすると、宗教的意味の上からは、自然は他の宗教的シンボルと特別な違いはない。逆に自然宗教と自然宗教として指摘されていない宗教とでは、自然の位置づけは変わらないことになるのである。

もちろん、自然宗教では自然が特に重要なシンボルであるという特徴があったはずだが、それだけなら、自然が各宗教でどのように解

積されていたかを羅列するだけで足りる。そこで、はたして「自然宗教」という新たなカテゴリーを設ける必要性はあったのだろうかという問いが再び浮上してくる。

最初に言及したように、これについては、著者には自然宗教固有のロジックや発展のマトリックスを抽出するという狙いがあった。しかし、結論的に著者がそれとして見いだしたものは、第一に、自然を実と見るか仮象と見るかというアメリカ的二重の自然観の展開となっている。著者はアメリカ自然宗教史を、あたかも担い手たちが、自然観の二重性をディレンマとして認識し、それを克服すべく努めた過程として描いており、これは大いに疑問である。この自然観は、著者あるいは当時のエリート知識人から見れば、非論理的と映ったかもしれないが、当事者もまたそれを矛盾と受け取っていたと断言できるだろうか（したがって、量子力学の出現によって初めてディレンマが克服されたという見解にも問題が出てくる）。「自然宗教」の新概念としての措定は、いつのまにか自然宗教が実体化され、一つの目的に向かって自己展開するかのような物語を与えられてしまうという陥穽も用意していたのである。その上に、自然が実在か否かは、自然物以外の事物を含めた存在論的問題から帰結するもので、自然自体から導出される問題ではないし、アメリカ固有のものでもないのだから、ここに自然宗教史を集約しては著者自身が味気無い還元論に陥ってしまうように思われる。

以上のように自然宗教について、シンボリックの意味の観点からみても、唯物論か観念論かをみても、この宗教の固有の様相は解明され難く、一つのカテゴリーにまとめた意義が希薄化する。冒頭で提示した独特な物質性などは掬いきれないのである。また、もちろん宗教の範囲をあまり狭く限定することはないが、何の要素が加わると単なる世俗的な生活規律や健康への配慮ではない自然宗教となるのかが不鮮明なため、かえってこの概念が生かされていないくらいがある。

これについては自然概念の規定も十分でないことが関わっている。例えば、physical religionにおける身体は自然なのか否か。数々の健康法における身体に課せられる過剰な規律は、解釈によっては、（著者のいう、調和と支配の平和的共存の状態ではなく）不自然さ、human natureの阻害ともいえる。

② 1で示したように、自然の宗教的意味づけはアメリカに限ったものではない。よって、ヨーロッパと比較して、アメリカの自然宗教の特殊性を挙げるとしたら、その発達規模に求められることになる。だが、著者はアメリカでは自然は重要な宗教的シンボルであり続けたというのみで根拠づけているわけではない。もし、アメリカにおいて事実自然宗教が著しく発展したのであれば、その原因、なぜ自然が中心の宗教的シンボルに選ばれたのかは重要な論点である。が、著者はこの点についてはその方法論的方向に反して、社会変動への不適合意識、不安の助長、関心の個人主義化・私化（脱政治・公共化）などの、社会科学や病理史の通説に言及するものの、宗教内部の原因としては、「人々の真の宗教的要求」といった説明よりも踏み込んではいない。近代社会への対抗手段としてなぜ自然がアメリカでは強調されたかということの考察が十分ではないのである。

この他にも原因・背景との関係で言及されることの多い、「民衆」の概念の規定に断りのないこと、民衆心性の特質が、（本書の研究の結果から推し量られるのではなく）しばしば前提となっていることも問題が多いと思われる。中間的な知識人なる人々が、民衆心性を最もよく表現しているというのも、自明視してよいのかどうか疑問である。

以上のような点で、著者の論にはなお困難が多いと思われるが、着眼点はアメリカ宗教史を対象とする上で、興味深いだけでなく不可避な問題をついている。また豊富な資料を駆使し、アメリカ史全体を論じる力量は、著者の研究の蓄積が並々ならぬものであることを示している。巻末の文献表も秀逸である。